

佛縁ゆえか

燃え続ける藝術人生

—伊藤三喜庵先生を訪ねて—

伊藤三喜庵
(喜三郎)

聞き手・佐藤俊明
黒田大圓

方丈〓今日は建築家の伊藤喜三郎先生としてではなく、画家の伊藤三喜庵先生として佐藤御老師と共に画と先生の絡み合いについてお話を伺いたいと思います。

先生は建築家としては、設計事務所を主宰され、既に内外に数多くの作品を残されています。特に、医療福祉関係については医科大学等は十六もの実績を残されると同時に建築作品では、建築学会賞をはじめ多くの受賞経歴をお持ちでいらっしやいます。また現在、建築界各種法人では会長、副会長、理事等の役員をなされ、社会に奉仕されていることも存じています。

善光寺の設計も先生にお願い致しましたが、建築のことはそれくらいにして先ず寺には先生の絵がたくさんございます。私がモデルになった大作の絵もありますので、先生と絵の関係について今日は紹介したいと思うわけです。先生は絵の方では、日本の墨絵界で代表的な社団法人日本南画院や自由画壇などで副理事長をなさっておられますね。

伊藤〓ええ。本当に私のための企画とは恐縮の至りで



す。それと私の絵があんなにたくさん集まっているところは善光寺のみです。とにかく小さい時から絵は好きで、七十才を越える今日に至って益々好きになるようです。これはかなり方丈さんの責任でもあるんです。(笑) 本日は、御期待にそえるようなお話ができませんかどうか、一体どんな事からお話申し上げたらいいでしょうか？

佐藤 善光寺は先生の美術館ですね。さて、まず先生はお小さい頃からどんなわけで、絵が特に好きになられたんですか？

伊藤 そうですね。育った環境とでも、或いは血統とか因果とも申すのでしょうか。

まず、私の先祖から申し上げます。伊藤家は芸術に關係の深い藤原氏の出のようです。祖母は名古屋の豪商の娘で、伊藤次郎左衛門氏、つまり松坂屋の初代と縁続きで、当時江戸の華やかかなりし柳橋で料亭をやっておりますそうです。

祖父の方は、当時槍の名手の侍で戌辰の役では切込

み隊長をやったり、石川県知事や憲兵隊の初代の隊長になったりした人物です。祖父と祖母、その剛軟混合の両親の間に生まれた私の父は、職業は剛の方で建築の裝飾金物の製作をやっておりましたが一方趣味の方は、祖母系で粹好みであった由です。父はそれが自慢とされた「宵越しの金は持たない」という気風の江戸っ子育ちで、家庭も全くそんな雰囲気でした。

私共の幼児期からずっと、兄と私を成すがままに放っておいてくれましたほとんど干渉しませんでした。

大正十年の頃の東京は江戸の延長でした。そんな中で、朝から晩まで近所の子供と遊んで過ごしたもので、樋口一葉女史の「たけくらべ」の世界です。

たまたま家の隣に、五、六才の千代ちゃんという女の子の親友がおりました。私が七才位です。千代ちゃんには、とにかく兔が好きで、年中兔の絵を描いてくれとせがんだものがございます。家の前は今日の昭和通りですがその頃はもちろん、交通もあまりなくアスファルトの道の上に、当時一銭位の蠟石を買ってきて、



The statue of Buddha
fasting. Lahore Museum
By Sanjivani



*The story of Grahams
9th Century*

兎が飛んでいる絵、太鼓を叩いている絵等、毎日毎日兎の絵を描かされました。それが私にとっては、絵の最初の出会いと言えましょう。

また両親は、美術が好きで上野の展覧会にはよく連れて行ってくれました。彫刻室の女の人の裸には幼少の私が一番恥ずかしかって眼を背けるのを両親は笑って見ておりました。やはり、ませていたのでしょうか？

(笑)

そんな訳で、兎から小学校となり、いろいろな絵を描いていくうちに、何か学校の代表になりましたりいろいろな事がありました。他の事はだめだけれど、私が絵を描くと皆がほめてくれるので一層好きになっただんじやないかと思えます。

佐藤〓小学校から中学校にかけては何か面白い事がございましたか。

伊藤〓中学校は神田の明治中学校でしたが、素晴らしい個性をのびしてくる校風でした。その頃の日本の社会は自由主義思想の爛熟時代でもあり、また社会主

義芸術運動も盛んでした。絵だ、文学だ、スポーツだ、それに片思ひも加わって、全ては少年期の美しい熱っぽいロマンの日々でした。

父の方は、建築の裝飾金物という仕事の関係からそのデザインには年中苦勞しておりましたので、私を画家かデザイナーになるならそれはそれでよいというような事を多分考えていたのでしょう。その頃は、全く勉強をしないで中学でスポーツでへとへとになって帰えいてはからは、また油絵でいよいよへとへとになり寝に就くというものでした。

中学四、五年になると、兄の方は兄の方で大学の方はいい加減で、「新築地」という左翼劇団によく出演しており、有名なレマルクの「西部戦線異状なし」では大活躍しておりました。弟の私は、学校をさぼって舞台装置やら、音響の手伝いやらに夢中になっていましたが、父はそれもほっておいてくれました。兎に角、変わった今から思えば中ぶらりんな家庭でした。小使ひ銭はいつも足りなくて困っていました。

*親類に新潮社の社長が居り、世界文学全集が大当たりをした頃なので、勉強はそつちのけで世界文学書を読み、文学の之も無料なので読みあさりました。それで学校の成績はしんがりをつとめました。(笑)

上野の美術館では入場券が五十銭でしたけれども、女の監視人達から、子供が年中来るけれどお小遣いが大変だろうという事で末で切符をくれまして、いつも無料で入れました。時には、その切符を入口で売ってラーメン代にしたこともありました。その切符の御礼に彼女達の着物の帯に油絵で何かの模様を描いてあげるので。その頃、世界的な画家の藤田嗣治さんが「ポラー本」と「パリーの横顔」という本を出版しました。私はその本を見て、大変感動したものです。その中で特に画を描く私の行くべき目標を決定づけたエッセイがありました。それは、画家は物を写真のように美しくうまく描いても意味がない。一番大切な事は、先ず自分の個性を開発して表現は前人未踏な分野を開拓して自分にしか出来ない美を創造することであり、

それがこれからの世界的な絵画運動の焦点になる。というような事です。確かに、エコールドパリの巨匠達は皆、その戦士であった訳です。私も、自分にしか出来ない絵画をどう創造するかという事に苦心に苦心を重ね、遂には絵具やカンバスまで学校をさばっても特別のものを自製せずにはいられなくなりました。ヨーロッパでは常識を自分の内から除き本来の自分の個性を知るために多くの芸術家が麻薬を使うとか酒びたりになるとかということが流行しておりました。それも本当の自からの個性的な作品を創造する手段であった訳です。

そして十六才の時、自製の絵具やキャンバスに金属のへらのみで表現した自己流の作品が前衛絵画運動の中心であった独立美術協会に初入選致し朝日新聞に出ました。この会は、野獣派と言われた新しい絵画運動で燃えている団体でございまして帝展(今日の日展)と違い、本当の芸術運動の固まりで、私も入選して以来いよいよ燃えたわけです。そして、中学を卒業した

らすぐにもパリに出掛けて行って、藤田嗣治さんのコースを自分も歩きたいという思いも固まりました。それから、いろいろな公募展に入選し始めました。そして、少年のロマン「愛と美に燃える放浪の画家」になりたいと自分を小説の主人公と混合して考えておりました。歌劇の「ラー・ボエーム」の感動も、私の少年期を揺さぶりました。

十六、十七才の子供の私が中学を休んで、二十三才の美しいモデルを家に呼んで裸にして、二百号位の大作にかかっておりまして、両親は私に協力的でございました。部屋は石炭ストーブでございましたけれども、父がよく石炭をくべに来てくれたり、母が紅茶を持ってきてくれたり私を一流の画家の扱いにしてくれましたが、内心はやはり裸の女性と部屋に閉じこもる私が心配だったのかもわかりません。それとも、私がモデルに接した時はセックスの感情などは湧かず、戦いを挑む闘士になることを理解したのでしょうか。今だに分かりません。



そしていよいよ中学を卒業する間際になって、パリに行くか、それとも日本でどうするかという事が家族の間で問題になりました。その時父は、やはり絵描き

さんは絵ではなかなか食べられない。だから、家も建築関係の仕事をしているのだから、とにかく大学の建築学科に入って建築をやりながら絵を描いたらどうか

というような結論になりました。そういえば、英語もフランス語も全くしゃべれないこともありましたが。中学卒業時は以上のような訳で学校の勉強はしていなかった。四十三人中四十番、しかも操行は丙でした。

しかし運が強いというのでしょいか全く奇蹟的にも日大理工学部に入学できました。どうも私の人生はスリルとサスペンスの連続です。今日の受験勉強連続の中学や高校や予備校の若い人達には全く想像も出来ないであろう夢のような青春でした。

大学の建築科に入ってみますと、大変な勉強が必要であり、今までのよきうではとても進学出来ないという事にギョッと気が付いたのです。たまたま、東大の総長の息子さんで内田祥文さんという方と机を並べていた時、彼は私にこう言うのです。「建築は、社会との係わりが大きい、大変スケールの大きな男の仕事である。絵の世界は金持ちのサロンを飾るだけのものではないだろうか」というような意味のことでした。これはショックでした。私も成る程と思い、とにかく

建築科の学生になった以上、今まで絵に打ち込んだ熱情を出来るかどうかとにかく転換しようと思いましたがそれはとても苦しいけれど、恋人と別れる思いで建築の学問の方に向かおうと努めました。中学時代の勉強のおさらいから始めて大学の勉強に専念する事を悲痛にも決定した訳です。私の大学時代の生活は、絵を描けない反発から、かえって烈しいヒンズー教の教徒のような気違いじみた勉強が開始されました。ほとんど寝ても覚めても勉強という事で、汚い話ですが、トイレットに入るにも、学期試験が終わったその日も勉強するというような時代が続きます。その結果中学でボクシングまでやっていた自信のある私の強靱な体は急速にやせ胃下垂や胃弱になやむようになりました。

しかしその大学でも、建築の設計図が、今まで盛んにやってきた絵の勉強のお陰で良いものが出来たと思いません。決まった水彩画法のみでなく、油絵、グアッシュ、パステルと種々の技術で表現してみました。学生時代の私の作品は殆ど色刷りとなり、一般学生の参考

に配られました。

故小野薫教授は、そんな学生の私を大変可愛がって下さって、パリから帰国したばかりの新進の国際的建築家、前川国男先生を紹介して下さいました。学業の傍、その事務所でお手伝いさせて頂くやら、東大の総長になられた内田祥三先生の建築の作品のピースを描くやらこれらのことは将来の私の建築家としての人生に大きく関わって来るんですが、考えてみますと、両先生は日本の最高権威を持った方々で、学生時代に超一流の建築家のピースを描くという事はなかなか無いのではないかと思います。幼い時の千代ちゃんに描いた兎が大変に成長した訳で建築家としての今日迄関わって来ました。

佐藤〓本当に人生というものは当人にとっては全く予測できないものでしょうね。

先生、それで大学時代はほとんど絵をお描きにならなくて、その後御就職とか、兵役とかがございましたかと思いますが、そのあたりをお聞かせ願えませんか？

伊藤〓お陰様で勉強の方に夢中になったので、大学は理工部を一番で卒業することができました。従って就職口はたくさんあり、私がどれを選ぶかというような状況でございました。私は、東大の営繕科の研究室のような所に臨時的に入って、もう少し建築の社会を勉強したいと思ひまして、臨時的な嘱託として入りました。これが他の所に正式に務めていると人生を決定するような事にもなるわけです。私にとりましては、将来を未知数にしておいた事が非常に良かったと思っております。その営繕科の研究室は八人位で、東大教授の玉子の集まりの部屋でしたので大変勉強になり、またそこに居られた先輩に対して今日迄も続く友情を得たのもここからでした。今日ではその人達は皆夫々の分野で建築界のリーダーになっております。

東の間の一年間で、その後軍隊に入る事になりましたが、兵隊に入った当時は第二次大戦の二年前でしたから、日本軍部の方針もあってか想像以上に厳しい毎日でございました。社会は自由主義から軍国主義に変

わりつつあった訳です。初年兵の時に、あまりの苦しさ
に仲間から自殺者が二人も出た位です。私はと申し
ますと、絵画への恋情がまたつのり夢を見るようにな
っていました。不思議に今でも鮮明に覚えている夢が
あります。その夢の一つは、すごい霧の中でカンバス
を立てて絵を描いているのですが、あまりに霧がひど
くて全く景色が見えないのに何か描こうとあせってい
るのです。霧の中から前述の内田先生が現れて私に一
寸声をかけられ、再び霧の中に消えて行きました。ま
たある夢では、室内のテーブルの上にいる緑色の三十
cm位の芋虫を見つめているうちに、それがいつの間
にか女体となり、緑色の肌に黄色の斑点が現れ、くるく
る廻りながら狂ったように舞うのです。私が飛びつい
て捕らえた瞬間、彼女に刺され眼をさしました時、
どす黒い苦しい現実が目の前にありました。

戦争が始まりましたが、外地に行くこともなく除隊
となり、日立製作所に防空の技師として勤め、終戦で
この仕事も終はり成建設の設計部に入る事になりまし



説法釈迦

た。

大成では、かの有名なライト氏の設計、帝国ホテルが火災で焼けたので、その復旧もやれました。焼土と化した東京はバラック建築のブームでしたが、そのバラック建築の中で銀座4丁目角のライオンビヤホールの大壁画とか、その他いくつかの壁画を梯子に乗って描くことも出来ました。

そして、大成建設を役三年八カ月で退職させて頂き、自分で設計事務所を開きました。苦しいけれど自由な世界が開けました。絵もだいぶ描けるようになりまして。三十七才になっておりましたが、その時は勿論社員は私一人で女房も収入の面では大いに心配でしたでしょうが、何とか楽しくやっているうちに一応の形が整って参りまして、社会保険中央病院とか、虎の門病院とか非常に大きな仕事をするチャンスも巡って参りました。

話が前後になりましたが家内のことを申し上げますと、三十才丁度、日立製作所に勤めておりました折り

に見初めたのが今の家内です。無料のモデルが出来たのです。長男は戦争の最中、アメリカのB29の爆撃中に生まれたのですが、当日の朝の家内の肖像画は今も残っております。

佐藤先生はその頃、絵という油絵とか水彩とかいろいろあると思いますけれど、まだ墨絵には入っておられなかったのですか？

伊藤はいい。殆ど油絵です。やがて事務所の方も順調に発展し、社員も三十名位になりました。中学時代から好きでやっておりましたボクシングが縁で、先輩の世話で日本学生ボクシング連盟の書記という形で、西ベルリンでの世界会議出席のため、まだ一般には許されなかった海外旅行のチャンスが巡って参りました。パリやローマ等では同行の連中の許しを得て二カ月半、自由に一人で飛び廻れることになりました。十六才の時の夢が四十才で実現された訳です。モンマルトルの丘に登った時は私の胸の中には少年時代からあこがれ敬愛する近代画壇の巨匠達が次々に去来し、感動で涙

が出て仕方ありませんでした。

ところが御承知の通り、パリやローマでは英語は殆ど通じません。私の英語でも何とかなると思っておりますが、一人旅で神経を使つたせいでしようか、胃と痔がおかしくなりました。ホテルで三日も四日もベッドに伏せていて、全く心細い限りでもう帰れないかなどと何度も考えました。美術館を廻りましても油絵のコテコテとねちっこいものばかり、食物も日本料理店はなく、さうりとしたお茶漬けなど夢で胃が痛いのに油っぽいものでヘトヘトになっておりました。

ノートルダム寺院のわきのセーヌ河畔の古本屋街を暮方一人で歩いていた時です。その古本屋の中に日本の墨絵の版画が目にとまりました。何と清新な清々しさだったでしょうか。その瞬間、眼が覚めました。私は日本人だ。食物も芸術も日本人は日本のものしかだめなんだ。少年期に読んだ藤田嗣治さんの言葉も思い出しました。私は日本人で、芸術も日本人でやらなければならぬんだ。その瞬間から、私は墨絵に入る

うと百八十度転換した訳です。

帰国後、中国の伝統をひもときながら根本的に墨絵の勉強を始めました。

伝統的な事に傾倒して追求していくうちに偉大な波にぶちあたりました。その偉大な波というのは、仏教文化です。そこで墨絵と仏教美術が私のテーマとなつて行きます。それで、仏教と墨絵の世界を源流にして自分の芸術を組み立てて行くべきだという事をはつきりと悟つたわけでございます。

その頃、私共の設計事務所帝国内ホテルの高橋貞太郎先生のお世話でインドに救ライセンターの設計をすることになりました。その何回目かの訪印の際、日本の代表的な宗教者の方々の団体の仏蹟参拝のお仲間に入れて頂く機会を得ました。その宗教者の中で兄弟のように気の合った方がおり、その方がここに居られる方丈様でございました。

方丈様にはインドの仏蹟を歩きながらいろいろ生きた現地での教えを賜りました。私は運の良い男です。

方丈様も私もどちらかというところあげつろげて、何でもしゃべりたい事はしゃべり合い、全く意気投合したわけでございます。靈鷲山の頂上で方丈様と黄金色に輝く夕陽を眺めながら、ここでお釈迦様が説法されたなどの御説明で感動してその光景をスケッチブックに焼き付けたわけでございます。私のそれからの宗教心は方丈様の直伝に拠るものでございます。以上が私の壮年期以降の墨絵と仏画とを結びつけていったきっかけです。本当に方丈さんとの出会いはこれこそ仏縁と
言うものでしょうね。

佐藤 先生は幼年期から今日に至るまでのお話を聞いてきました。が、仏縁という事をしみじみ感じさせられま
す。

伊藤 有難いお言葉です。とにかく今だに絵に夢中になっておりまして、毎日寝る前に少なくとも二、三時間アトリエに籠もらないと寝つきが悪いというような癖がついてしまいました。その原因の一つには方丈様の存在があると思います。方丈様は私が何を描いても

日本一だ日本一だと大変お誉め下さるので、私も何か本当にそのような気持ちになってきて、また一生懸命になるという次第です。(笑)

しかし、芸術という世界は大変難しゅうございます。また、芸術の情報も非常に多く、価値観もいろいろ変わります。作者はそれぞれに自分の道を探しあぐねて居ります。本当に何が良く何が悪いのかという事は、これからはいよいよわからなくなってくると思います。私はこれで食べて行かなくても良いので、そういう事にあまり煩わされなくて方丈様の激励の下に、今後とも仏教心を基盤にして勉強していくつもりでございます。

今日は全く私のプライベートな絵の世界のことでいろいろと御時間を頂きまして本当に有難うございました。

佐藤・方丈 大変有意義なお話をお聞かせいただきまして本当にありがとうございます。

於、伊藤三喜庵先生宅